「かわいい」感情と笑顔の関係についての研究

大橋　紅音

近年，日本で流行している言葉の一つに「かわいい」がある。特に女性は日常生活において，人間や動物の赤ちゃん，キャラクター，洋服，菓子などに対して「かわいい」という言葉を使うことが多い。「かわいい」は，対象の属性を表現する言葉ではなく，対象に向けられた感情を表現する言葉である。この点を明確にするために，本研究では「かわいい」感情という用語を用いる。これまでの研究では，かわいいものを見ると笑顔になる，笑顔はかわいいものとして評価されるなど，「かわいい」感情と笑顔との間に深い関係があることが示唆されてきた。また，「かわいい」感情は笑顔を媒介として社会的関係のなかで増幅するという「かわいいスパイラル」仮説が提唱されている（Nittono, 2016）。しかし，笑顔でいると対象をよりかわいいと感じやすくなるのか，かわいさについて考えることが笑顔の表出につながるのか，といった具体的な仕組みは分かっていない。本研究は，「かわいい」感情と笑顔の表出の関係を明らかにすることを目的とした。

実験 I では，笑顔の表出が「かわいい」感情に与える影響に着目した。笑顔を表出することで同じ対象であってもよりかわいいと評価されるという仮説を立てた。かわいいと表現されることのある対象を単語または語句として提示し，そのかわいさの程度を 7 段階で評定してもらった。表情を操作するために，笑顔を表出する群では「イ」の音を，笑顔を抑制する群では「オ」の音を発声させながら，評定課題を行うように求めた。実験の結果，表情操作の種類によってかわいさ評定値は変化せず，仮説は支持されなかった。その理由として，表情操作の問題点と刺激の問題点が挙げられる。笑顔を作る表情筋を人工的に動かすことが対象の評価に与える影響はわずかである。もしポジティブ気分を喚起して自発的に笑顔になれば，かわいさ評定値は上昇するかもしれない。また，文字ではなく，赤ちゃんや小動物の写真など，もともとかわいいと感じられる刺激を用いれば，表情操作の効果が生じやすい可能性も考えられる。

実験 II では，かわいさについて考えることが笑顔の表出に与える影響に着目した。対象のかわいさに注目しているときは，より客観的な判断次元である美しさに注目しているときに比べて，笑顔に関連する表情筋の活動が大きくなるという仮説を立てた。6 ヶ月齢の乳児の合成顔を刺激として提示し，そのかわいさまたは美しさを 7 段階で評定しているときの表情筋筋電図を測定した。笑顔を表出するときに活動する大頬骨筋と眼輪筋，不快感情を抱くときに活動する皺眉筋の 3 部位から記録した。また，かわいさについて考える構えの効果を検討するために，刺激が提示される前のベースラインの表情筋活動量も条件間で比較した。実験の結果，かわいさを評定しているときは，美しさを評定しているときに比べて，画像刺激に対する大頬骨筋と眼輪筋の反応が大きくなった。ベースラインの活動量に差はなかった。つまり，かわいさを判断しようという構えそのものが笑顔を作り出すことはないが，その構えのもとで出会った刺激には笑顔の反応が大きくなったといえる。

実験 I では仮説が支持されなかったが，実験 II では「かわいい」感情と笑顔の関係についての新しい知見が得られた。今後は，笑顔の表出とかわいさ評定の関係について，表情操作や刺激を変えて再検討する必要がある。さらに，二者以上からなる社会的関係における笑顔の役割を検討することにより，「かわいい」感情についての理解がより深まると期待される。（基礎心理学）